

# 原住民戶外教育的現況： 從阿拉斯加與北海道的投入工作論起

先住民野外教育の現在：アラスカと北海道での取り組みから

Current State of Ethnic Outdoor Education: On Work Devotion in Alaska and in Hokkaido

文・圖 | 近藤祉秋 KONDO Shiaki (北海道大學愛努・先住民研究中心講師)

譯者 | 陳由璋 (政治大學民族學系博士生、日本北海道大學愛努・先住民學講座博士生)

文責・圖 | 近藤祉秋 KONDO Shiaki (北海道大学アイヌ・先住民研究センター助教)

訳者 | 陳由璋 (政治大学民族学学科博士課程、北海道大学アイヌ・先住民学講座博士後期課程)

**現在**、世界各地で先住民文化の復興と次世代への継承に関する取り組みがおこなわれているが、狩猟や漁撈などの生業活動やそれに関わる食文化・儀礼も、その対象となっている。都市に居住する先住民の場合、伝統的生活圏での野外活動を経験する機会は通常限られているし、コミュニティに住む先住民の人々であっても、法律上の規制のため、現在では日常的に実施することが難しくなった活動もある。本稿では、先住民の伝統的な生業活動・食文化を実地で学ぶための野外教育活動（以下、「先住民野外教育」と呼ぶ）に焦点を当てる。筆者はアラスカ先住民文化の研究者であるため、おもにアラスカの事例を紹介するが、後半では北海道における取り組みにも触れることとする。

## アラスカ先住民の文化キャンプ

アラスカ先住民による野外教育の試みは、「文化キャンプ」や「伝統知識キャンプ」と呼ばれている。先住民の若者・子どもが古老や年長世代とともに

**現在**、世界各地目前都致力於原住民文化的復興與下個世代繼承的相關工作，狩獵、漁撈等生計活動與其相關的飲食文化、儀禮也成了復興對象。若是居住在都市的原住民情況時，通常在傳統性生活圈內體驗野外活動的機會是有限的，即使是居住在社群的先住民們，因為法律上的限制，有些活動現在也很難日常性地實施。本稿將聚焦於實地為學習原住民傳統性生計活動、飲食文化的野外教育活動（以下稱為「原住民野外教育」）。因為筆者是阿拉斯加原住民文化的研究者，所以主要會介紹阿拉斯加的事例，後半也會提及北海道內的投入工作。

## 阿拉斯加原住民的文化營

阿拉斯加原住民所做的野外教育嘗試是被稱作為「文化營」或「傳統知識營」。目標是放在原住民的青年、小孩與



捕魚車で捕獲されたマスノスケなどの魚類。  
用捕魚車所捕獲的國王鮭魚等魚類。

に伝統的生活圏の中にある狩猟や漁撈に適した場所に向かい、数日間から数週間にわたって泊まり込みで野外活動をおこなう。その場所でその時期に生息する動植物に関する文化が学習の対象となり、古老や年長世代が生業活動を実施するのを若者や子どもが手伝ったり見学したりする中で体験的に学ぶことが目指される。狩猟や漁撈にまつわる精神文化や先住民言語が教授されることもある。

例えば、内陸アラスカ先住民グイッチンの古老ポール・ウィリアムズ・シニア氏は、2016年から毎年6月後半から7月のマスノスケ（キングサーモン）遡上時期にあわせて「ホワイトアイ伝統知識キャンプ」を主宰してきた。ポール氏が所有するユーコン川流域の野营地（ポール氏の自宅があるビーバー村からモーターボートで2時間ほどの距離にある）にグイッチンおよび非先住民の人々が集まって、マスノスケ漁と薫製作りの技術などを学んだ。

このキャンプでは、マスノスケの捕獲にあたって捕魚車が用いられた。捕魚車とは、川の流れを動力とする水車のような仕組みでカゴを回し、川の中

耆老或年長世代共同在傳統性生活圈之中，走入某些適合狩獵或漁撈的地方，歷經數日到數週的野營中並進行野外活動。以當地當期所生長的動植物相關文化為學習對象，青年或小孩幫忙或學習耆老或年長世代實施生計活動之中體驗學習。也會教授到狩獵或漁撈相關的精神文化或原住民語言。

例如，內陸阿拉斯加原住民哥威迅（Gwich'in）的耆老Paul Williams Senior先生，一直從2016年配合每年6月下旬到7月的國王

鮭魚（King salmon）溯流時期，主辦「白眼傳統知識營」（White Eye Traditional Knowledge Camp）。在Paul所有的育空河流域的野营地（從Paul先生家所在比弗（Beaver）村搭乘馬達船約有2小時左右的距離），哥威迅（Gwich'in）與非原住民人都聚在一起，學習捕撈國王鮭魚與製作煙燻鮭魚的技術。

在這個知識營中，捕捉國王鮭魚時會使用捕魚車。所謂的捕魚車，是用類似以河川流動作為動力的水車運轉方式來轉動魚籠，是可以撈起捕獲游在河裡的魚的裝置。其實這種捕魚車是20世紀初期的淘金熱時期從外面傳入的技術，現在的內陸阿拉斯加原住民則將這個到20世紀後半為止在生活中發揮重要功效的裝置當作是本身的「文化」或「傳統」的一部分。可以說這個想法是不管其來歷，為了延續傳統性生活圈內的生活，將這個長期以來熟悉的有益技術視為「文化」。



捕魚車の修理作業をする参加者。  
進行捕魚車修理作業の参加者。

を泳ぐ魚をすくいあげて捕獲する装置である。じつは捕魚車は20世紀初頭のゴールドラッシュ期に外部から導入された技術であるが、現在の内陸アラスカ先住民は20世紀後半まで生活に重要な役割を果たしたこの装置をみずからの「文化」や「伝統」の一部として捉えている。来歴に関わらず、伝統的生活圏での生活を続けるために有益で長く親しまれてきた技術を「文化」と捉える考え方であると言える。

#### 大学教育との連携

「ホワイトアイ伝統知キャンプ」の企画運営に際して、主宰のポール氏以外にもアラスカ大学に所属する研究者のマイケル・コスキー氏が協力している。このキャンプには、付近の村に住むグイッチンの人々や現在州外に居住するアラスカ先住民の若者の他、少数ではあるがアラスカ大学の学生が参加したことがある。「ホワイトアイ文化キャンプ」に参加したアラスカ大学の学生はあくまでも課程外の活動として自主的に同行していたが、先住民野外教育を高等教育との連携を視野に

#### 與大學教育的合作

企劃營運「白眼傳統知識營」(White Eye Traditional Knowledge Camp)之際，除了主辦的Paul以外，阿拉斯加大學的研究員Michael Koskey也有給予協助。這營隊中，除了附近村居住的哥威迅族人與現在居住在州外的阿拉斯加原住民年輕族人外，還有少數的阿拉斯加大學學生參加。參加「白眼傳統知識營」的阿拉斯加大學學生雖僅是以課外活動方式自主性同行，但也可以考慮將原住民野外教育納入與高等教育合作的視野。

於1990年代，內陸阿拉斯加的Minto村的耆老與阿拉斯加大學的教育人類學者Ray Barnhardt共同企劃「Old Minto文化營」。在這個「文化營」，不只是村落的年輕人，有意從事教職的阿拉斯加大學學生，也能以授課的一環方式參加營隊。在教師培養課程之中，設置學生體驗原住民文化的機會，讓學生能夠理解村落裡的生活模式，以圖培育出的教育人才考慮到自己以後教導的學童與監護人的文化。對於至今為止的學校教育對於原住民文化欠缺考慮，一直以來以西方價值觀與實踐的強押之批判日益高漲，因為這項投入工作是繼基於此批判之上。

#### 愛努文化集訓

愛努文化傳承相關活動中，也有採用原住民野外教育法的情況。例如，聚集對愛努文化關心的人們的市民團體「yayyukar之森」(譯者注：yayyukar是愛

入れて考えることもできる。

1990年代には、内陸アラスカ・ミント村の古老とアラスカ大学の教育人類学者レイ・バーンハート氏が「オールド・ミント文化キャンプ」を共同で企画した。この「文化キャンプ」では、村の若者だけでなく教員志望のアラスカ大学の学生が授業の一環として参加することができた。教員養成課程において学生が先住民文化を体験的に学ぶ機会を設けることで、村での生活様式に対する理解を持ち、担当することになる児童生徒や保護者の文化に配慮した教育ができる人材の育成が図られていた。これは、これまでの学校教育が先住民文化に対する配慮を欠いており、西洋的な価値観や実践の押しつけとなってきた点に批判が強まっていることを踏まえた取り組みであった。

#### アイヌ文化合宿

アイヌ文化の継承に関連する活動においても、先住民野外教育のアプローチが取られている場合がある。例えば、アイヌ文化に関心をもつ人々が集まる市民団体「ヤイユーカーの森」でも、シカ狩りキャンプが開催されていた(計良光範『アイヌ文化の実践《ヤイユーカーの森》の二〇年』寿郎社、2014年)。

筆者は、北原モコットウナツ氏(北海道大学アイヌ・先住民研究センター)が2018年6月に二風谷で企画した「アイヌ文化を学ぶ合同合宿」に参加した。この合宿の参加者は、アイヌ文化に詳しい現地講師、アイヌ文化伝承者育成事業の研修生・引率者、北海道大学の学生・教員であった。この合宿に参加した北海道大学の学生は、同年3月に筆者と北原



ホワイトアイ文化キャンプの会場。  
白眼傳統知識營的會場。

努語，yay是自己，yukar是行動的意思)，也有舉辦獵鹿營(計良光範《愛努文化的實踐『yayyukar之森』の二〇年』壽郎社、2014年)。

筆者曾參加北原Mokottunas(北海道大學愛努・先住民研究中心)於2018年6月於二風谷企劃的「學習愛努文化的共同集訓」。參加集訓者是熟知愛努文化的當地講師、愛努文化傳承者培育事業的研修生與帶領人、北海道大學的學生與教師。參加此集訓的北海道大學學生，有修課參與同年3月筆者與北原所率領的加拿大不列顛哥倫比亞大學的海外研修(短期留學特別課程)，學習加拿大原住民學的動向。北原認為學習加拿大原住民的學生也會學習愛努文化，同時，與同年代的愛努年輕人交流這件事可以跳脫對愛努人的刻板印象，希望建立機會了解日本原住民的狀況。

上述的「學習愛努文化的共同集訓」中，主要學習內容是turep(大姥百合)的採集與加工、調理。藉由當地講師的介

氏が引率したカナダ・ブリティッシュコロンビア大学での海外研修（短期留学スペシャルプログラム）を履修し、カナダ先住民学の動向を学んでいた。北原氏は、カナダ先住民について学んだ学生がアイヌ文化についても学び、かつ、同年代のアイヌの若者と交流することでアイヌの人々に対するステレオタイプの理解から脱しつつ、日本の先住民の状況を知りたいと考えていた。

上記の「アイヌ文化を学ぶ合同合宿」では、トゥレプ（オオウバユリ）の採集と加工・調理がおもな学習内容であった。現地講師の案内によって、参加者はトゥレプなどの植物を採集した。採集にあたっては、アイヌ語の唱えごとも教授され、アイヌ文化に基づいた野外活動となるように心掛けた。その後、伝統的なやり方を記録した映像を参考にしながら、トゥレプの根茎をすりつぶして得た澱粉を焚火で調理した。植物利用に関する実習以外にも、アイヌ文化の伝承に携わる関係者からレクチャーがあった。

### 先住民野外教育の可能性

本稿では、アラスカと北海道の取り組みから先住民野外教育を論じてきた。多くの先住民社会では、若者が伝統的な生業技術を身につける際にも年長の熟練者に同行する中で実践的に学習するのが一般的であったと考えられる。先住民野外教育は、コミュニティや家庭において慣習的に採用されてきた学習・教育の方法を社会教育（文化伝承のための研修を含む）や学校教育の場にも積極的に取り入れることを意味している。

先住民の伝統的生活圏での野外活動を学ぶ場を作ることは、第一の目的である先住民社会内での文化継承に貢献するのみならず、（主宰者や指導者が非先住民の参加を許容する場合）教員養成や学生研修における多文化教育を推進する手段としても構想



マスノスケを解体するグイッチンの参加者。  
處理國王鮭魚的哥威迅族（Gwich'in）の参加者。

紹、参加者採集turep等植物。採集の時候、也會教授愛努語の咒語、留意到野外活動能夠立足於愛努文化。之後、會一邊參考紀錄傳統做法的影像、一邊將turep的根莖磨碎後取得澱粉生火調理。除了植物利用相關實習以外、也有從事愛努文化相關者的講課解說。

### 原住民野外教育的可能性

本稿中從阿拉斯加與北海道的投入工作論及到原住民野外教育。許多的原住民社會，一般都認為年輕人學習傳統性生計技術時，也要在年長的熟練者陪伴中實踐學習。原住民野外教育意味著在社會教育（包含為了文化傳承的研修）與學校教育的場合，也要積極地導入社群或家庭裡習慣採用下來的學習與教育方法。

在原住民的傳統性生活圏内製作學習野外活動的場域這件事，首要目的不僅是對某原住民社會內的文化繼承有所貢獻，（主辦者或指導者容許非原住民的參加情況）也可構想成教師培育或學生研修中推

しうる。先住民野外教育と高等教育がどのように連携できるかについては、本稿で紹介した取り組み以外にも「デチンタ研究・学習センター Dechinta Centre for Research and Learning」（カナダ・北西準州）などの先行する事例があり、今後、更なる実践・研究が蓄積されていくと考えられる。

さらに言えば、先住民野外教育の取り組みは、いわゆる「教育」の文脈とはやや異なる側面でも注目されている。内陸アラスカでは、若者や子どもが健康的なライフスタイルを送るための指針を与えることを目的とした「ウェルネスキャンプ」が開催されている。これは、基本的には「文化キャンプ」と同様の形式でおこなわれるが、「トーキングサークル」（参加者が車座になって集まり、共感的な態度で他の参加者の意見を聞き、みずからの考え・感情を述べる集まり）のような精神保健的な効果が期待される実践も含む。伝統的生活圏での野外活動を再活性化させる取り組みは、現代に生きる先住民のみずからの子弟を導き、伝統文化を踏まえた新しい生活様式を主体的に築いていく道にも開かれている。◆

動多元文化教育的手段。針對原住民野外教育與高等教育該如何合作，除了本稿所介紹的投入工作以外，也有「德欽塔研修學習中心Dechinta Centre for Research and Learning」（加拿大・北西準州）等先例，今後，我認為能有更進一步的實踐與研究累積下去。

更進一步說的話，原住民野外教育的投入工作，與所謂的「教育」的文脈稍有不同層面也受到關注。於內陸阿拉斯加，有方針為了年輕人或小孩能有健康的生活方式，有舉辦以此為目的的「健康營（wellness camp）」。這個營隊，基本上與「文化營」相同的形式舉辦，其實踐也包含期待能有「talking circle」（參加者聚在一起圍圈而坐，以同感的態度聆聽其他參加者的意見，闡述自己的想法、感情的聚會）般的精神保健效果。再活化傳統性生活圏内野外活動的投入工作，也是開創出活在現代的原住民親自引導子弟，主體地建構出立足於傳統文化的新生活模式下去的道路。◆

### 作者簡介 | プロフィール

#### 近藤 祉秋 KONDO Shiaki

北海道大学アイヌ・先住民研究センター助教

1986年、静岡県生まれ。専門は文化人類学、アラスカ先住民研究。アラスカ先住民の狩猟や漁撈に関する伝統文化とその現代的な意義について関心を持っている。

共編著に、『犬からみた人類史』（大石高典・池田光穂との共編著、2019年、勉誠出版）がある。論文に、「食料主権論からみたアラスカ先住民の生業と伝統食の現在」『日本食生活学会誌』29巻1号、2018年など。



#### 近藤 祉秋 KONDO Shiaki

北海道大学愛努・先住民研究中心講師

1986年静岡県出生。専門は文化人類学、アラスカ先住民研究。關注於阿拉斯加狩獵與漁撈相關傳統文化與其現代性意義。

共同編著有《從狗所見的人類史》（與大石高典・池田光穂共同編著、2019年、勉誠出版）。論文有〈從食料主權論所見阿拉斯加原住民的生計與傳統食物之現況〉《日本食生活學會誌》29卷1號、2018年等文。